

「夢見」
 眠りそうになったときに
 聞こえる君の声がいつも
 いい言葉だけならいいの
 に／さんざん引っかきま
 わして消えるだけなんて
 ずるいよ／閉じた目がじ
 わり水分に覆われて皮膚
 をつたうのがわかっても
 拭う気力もない／夢見も
 目覚めも悪いなんてそん
 なのいいわけがない

偶然撮れた写真の中の君が
 僕のほうを見ているのは
 偶然じゃない

いいのにな
 僕を必要としてい
 るのは僕だけ
 愛想笑いとか別に
 いいよ

波に乗るってそういうことなんだろう
 ポクニハカケンケイナイ
 エイエンニカンケンケイナイ
 勢いつけてジャンプして
 届くか届かないかは他の誰かが決める

いてもいなくても一絡。
 なりたかったものの一つだ。

ぎゅっとして、って言ったら
 暑苦しい、って笑ってくれ
 るかな

じゃあどうしたいの？ と、戦い。
 自我なんかなくていい、誰かのパーツに
 なればいい。そしたら傍に置いて
 もらえるだろうから。
 時々一人になればそれでいい。その時
 に泣いて全部捨ててるから、そしたらまた
 また、なんか、ないのか。

人さみしいだけで
 ふれあいたいわけじゃない
 笑顔で近づくヤツなんか
 信じるわけにはいかないんだ

「雨」
 くる日も、くる日も。
 晴れた日に役に立ったことはないが、
 雨の日はこんなことにしか役に立たな
 い。雨量計のような身体よりも、サツ
 カーやバスケットが上手な身体がほしい。
 僕はトイレに隠れて泣くことがある。
 流す涙も貯めた方がいいのだろうか
 と考える。答えはわからず、足元の雨量
 はふえつつける。今日も雨。

「雨」
 雨の日は足どりが重い。歩くたびに足
 元からたふんたふんと音がする。
 僕の身体は他の人と違って雨が降ると
 足元からたまつていくようになってい
 る。外にいる時はもちろん、部屋の中
 にいても。だから雨がどれくらい強い
 のか僕で確認したりすることもある。
 今日も一時間に一回理科係が僕のどこ
 ろまで来て、降水量を調べていく。こ
 の一時間は20mm。降り始めからの
 総雨量は120mm。昨日よりも多い
 みたい。そして調べ終わると彼らは僕
 を見て同情のような感みのような顔を
 して離れる。

「一人になった時に
 一人にいる意味を考えた」
 したかったことって
 なんだったんだだろうかと
 丸めたチラシ
 マイクがわりに歌ったりとか
 ビデオ見ながら
 一緒にのおどつてみたりとか
 ご飯作つて
 一人で食べて裸のままねむつて
 長い時間かけて風呂に入つて
 そんなことを
 そんなことをしたかったのだろうか
 自分は

「一人になった時に
 一人にいる意味を考えた」
 誰のことも
 好きにならなくていいんだなあ
 つつて気がついたらなんだか
 急に楽になつて
 おもいついたように
 部屋の掃除はじめて
 読みかけの本を
 まとめて読んでみたりして
 できなかつたことを
 全部やろうとしている

そんなことをしたかったのだろうか
 自分は
 電話とかメールは
 まだしばらくしたくない
 外に出るのも当分いい
 誰にも会いたくない
 いつか
 そんなことをしたくなつたときまで
 くりかえす
 自問自答つとつてきつことす

「水玉」
 ふさけて散らすぬるい水に
 はしゃぐ僕らの夏はこれが最後
 地面の水玉もすむに消えて
 同じくらいのスビッドで
 今日のこととも忘れる
 夢を見るか？
 ネキストデータの



添嶋文庫「あまえたら負けだ。」
 二〇一四年六月七日 初版発行
 著者 添嶋 譲
 発行所 空想少年は
 ウェブサイト
 literary-ace.littlestar.jp
 QRコード

「発声練習」
 たいまは今日 最初の言葉
 これがついて 声に出して
 昔もたれをハックドに
 宇宙飛行士の訓練開始
 まわる まわる まわる
 目もイスも教室も地球も
 すべてのものがまわつて
 笑う 笑う 笑う 笑う
 夕闇に埋れたまま
 ニースの音だけ頼りに

「緩やかな」
 先生のスを借りて
 一人はすわつて 一人は立つて
 居るか居かないかでいうと届かない
 許すか許めるかというと許めない
 伝わるか伝わらないかというと届かない
 許容ではなくて諦観
 緩やかな
 緩やかな
 拒まないのではなくて流される
 生きる生きないだったら生きてくれない
 その程度の

「緩やかな」
 屋休みの窓の外は
 土とボールが飛びかつて
 走る 跳る 転がる 追う 連中
 あれに群がるあめみたいだと
 後ろの席のムラカミにいうと
 どんだけ溜まつてんだよと
 笑うので 僕も笑う
 止めてほしいならそつちを
 ナラ見するなよ
 最初つから
 子どもじゃあるまいし
 しほらくすれば忘れよ
 たぶんすぐ